

2020年8月30日 説教「神の約束を疑わず」

創世記 41 章 46～57 節

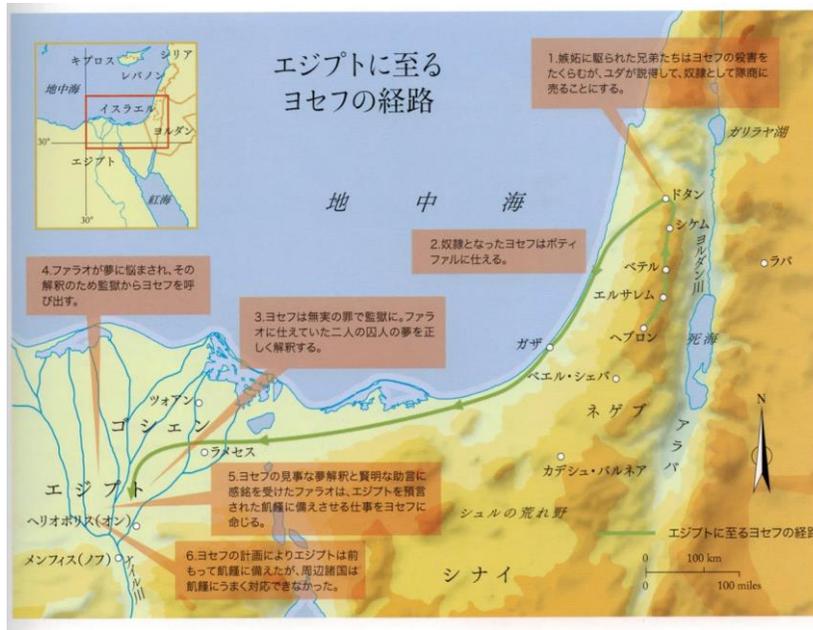
「すべてに時がある」ことをヨセフの生涯は教えてくれています。

1. 最初の七年の施策 (46～49 節)

- ①三十にして立つ (46) 「**ヨセフがエジプトの王パロに仕えるようになったときは三十歳であった**—ヨセフはパロの前を去ってエジプト全土を巡り歩いた。」ヨセフが兄弟達に売られたのが 17 歳。それから 13 年たっていました。彼はパロの夢を解き明かしたことから、総理大臣に任命されました。驚くべき導きでした。ヨセフに託された事の中の重要課題は、この国にこれから起ころうとしている出来事への対応でした。職に任命されるとヨセフはすぐに、全国を巡り歩いてその実状を自分の目で確かめようとしたのです。それは神が与えてくださった実行力によりました。彼に地位を貪る態度是一片もありません。
- ②豊作と貯蔵 (47～48) 「さて、**豊作の七年間に地は豊かに生産した。そこで、ヨセフはエジプトの地に産した七年間の食糧をことごとく集め、その食糧を町々にたくわえた。**」さて、夢の解き明かしの通りに、国の農作物の収穫は豊かでした。豊作であれば、いささかは心を許して贅沢になり放漫な管理をしがちですが、ヨセフはそうしませんでした。七年間の豊作の期間にエジプト中の収穫物を最大限に買い集めて、それぞれの町々の倉庫に備蓄したのです。
- ③穀物は海の砂のように (49) 「**ヨセフは穀物を海の砂のように非常に多くたくわえ、量りきれなくなったので、ついに量ることをやめた。**」ヨセフは食糧の蓄えを徹底して行いました。穀物を「海の砂のように」とあるように、無駄を排すとともに、量の統計をしっかりと記載したのです（裏の絵を参照）。国が管理する食糧の量を把握する必要があったからです。その仕事は量りきれないほどになりました。つまり、たくさんある倉庫の、細部まで正確に管理できないほどになっていたのです。最後には量ることをやめるほどでした。ともあれ、国中にそれなりの食糧が確保できたことは間違いありません。

2. 豊作の時に生まれた二人の男子 (50～52 節)

- ①二人の子どもの誕生 (50) 「**ききんの年の来る前に、ヨセフにふたりの子どもが生まれた。これらはオンの祭司ポティ・フェラの娘アセナテが産んだのである。**」さて、エジプトの地においてパロの仲立ちで結婚したヨセフは、豊作の期間に二人の男子に恵まれました。ヨセフの妻の名はアセナテで、オンの地の祭司ポティ・フェラの祭司でした。二人が生まれたのは、結婚して 7 年の年月の内でした。飢饉の来る前でした。そのころ、ヨセフが穀物を秩序正しく保存することを、着実に行っていました。それはまた、ヨセフがエジプトの地を治めるにあたって、さまざまな知恵を尽くし、部下や国民を平和のうちに整えている時期でもあったでしょう。



②マナセ (51)「ヨセフは長子をマナセと名づけた。『神が私のすべての労苦と私の父の全家とを忘れさせた』からである。」長男の名前はマナセ。「忘れる」というヘブル語から派生。労苦を忘れようとしても、父の家を忘れようとしたわけではないと思われまふ。むしろ、兄達がなした、彼への辛い仕打ちを忘れるということでしょう。父イスラエルやその家族が彼にとっては、存在の根本にあったのですから。このマナセの子孫である一族は約束の地において、分割の地を得ています。ヨセフは子供達がイスラエルの子孫として進んでいくことを強く願っていたことから、その結果がもたらされたのでしょう。

③エフライム (52)「また、二番目の子をエフライムと名づけた。『神が私の苦しみの地で私を実り多い者とされた』からである。」次男の名前はエフライム。これはヘブル語の実るという語から派生。苦しみを越えて、実りを与えてくださる主を覚えて名づけられたのでしょう。まさに豊作の時代に生まれたエフライムにぴったりの名でした。エフライムの名もその子孫の一族が約束の地に分割地を得ています。エジプトの祭司の娘の子として生まれた、マナセとエフライムの子孫がイスラエルの一族に加えられていくということが興味深いです。

3. 飢饉の七年の間のヨセフの施策 (53~57 節)

①飢饉の到来 (53~54)「エジプトの地にあった豊作の七年が終わると、ヨセフの言ったとおり、七年のききんが来始めた。そのききんはすべての国に臨んだが、エジプト全土には食物があった。」七年の豊作の後には、飢饉が来ました。エジプトばかりではなく、周辺諸国にも飢饉が及んだということは、広い地域に天候不順が、長年にわたって続いたのでしょう。少なくとも七年は作物ができない状態が続きましたが、ヨセフの政策により、エジプトの食糧は確保されていました。

②食物を求め (55)「やがて、エジプト全土が飢えると、その民はパロに食物を求めて叫んだ。そこでパロは全エジプトに言った。『ヨセフのもとに行き、彼の言うとおりにせよ。』」そのうちエジプトの民も、確保していた食糧がなくなり、飢えが始まり、パロに食物を求めました。パロはヨセフへ所に行って、彼の指示に従うように伝えました。

③世界中からヨセフの元へ (56~57)「ききんは全世界に及んだ。ききんがエジプトの国でひどくなったとき、ヨセフはすべての穀物倉をあけて、エジプトに売った。また、ききんが全世界にひどくなったので、世界中が穀物を買うために、エジプトのヨセフのところに来た。」飢饉は当時の全世界ともいえる地中海諸国に及んだのです。ヨセフはまず、全エジプトにある穀物の倉庫を開いて、まずはエジプト人に売り始めたのです。無料ではありませんでした。また、世界中からエジプトから穀物を購入するために、ヨセフの所にやって来ました。あの夢の解き明かしがされた時に、誰もこんなことを予想していなかったでしょう。それは、主の深いご計画でした。

《結論》

ヨセフはパロの夢の解き明かしをした後に、総理大臣に任命されました。神はヨセフに夢を通して、御心を示されたのです。エジプトの政治を担うことも神の御心でした。ヨセフ自身もそのことを次第に自覚させられたからこそ、職務を引き受けたのでしょう。

そのヨセフにとっては、神から示されたことを心から信じて行うかどうかが、重要な課題となりました。ヨセフは主の啓示を信じ、最初の七年の豊作の時に、徹底して食糧の貯蔵に努め、国中にその方策を行わせたのです。これはできるようで、できません。豊作の時には、長期の飢饉が来るということを想像しにくいからです。しかし、ヨセフは主の示された御心を信じ切ったのです。かつて、ノアが神からの命令を受けて箱舟を家族で造り始めましたが、周りの者達は彼をあざ笑いました。しかし、主の警告通りに大雨が降り続いて洪水となったのです。ヨセフの場合も豊作の時には思い描けない飢饉が確かにやってきたのです。天候を変えることは誰にもできません。今回の、新型コロナウイルス問題でも、世界の民がうろたえているのは、人間の力が及ばないウィルスが相手だからでしょう。ヨセフの時代に起きた世界の飢饉には、どの国の人々も抗うことができませんでした。ヨセフは曾祖父から受け継いだ信仰によって生きました。「彼 (アブラハム) は、不信仰によって神の約束を疑うようなことはせず、反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し、神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。」(ローマ 4:20~21)とあります。ヨセフは豊作の時にも神の約束を信じ、懸命に穀物を貯蔵しました。人がなんといっても、ヨセフは主が言われたことを信じて行ったのです。今朝、私たちが教えられることの第一は、主の導きの御言葉を大切にすることです。それを温めていくことです。

もう一つ教えられたいことは、ヨセフの仕える心 (サーバントハート) です。彼は総理大臣に任命されるとすぐに地方巡りを始めています。大臣の椅子に坐って権力を誇示するような様子が全く見られません。キリストは「異邦人の支配者と認められた者たちは彼らを支配し、また偉い人たちは彼らの上に権力をふるいます。しかし、あなたがたの間では、そうではありません。あなたがたの間では偉くなりたいと思う者は、みなに仕える者になりなさい。あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、みなのもべになりなさい」(マルコ 10:43-45)とされました。ヨセフには、人々のしもべとして仕える心が主から与えられていたのです。私たちが社会にあっても、家庭にあっても、そして教会においても、この「仕える心」をもって働いていけば、きっと祝福されます。教会の働きにおいて、キリストの御言葉を覚えつつ、お互いに仕え合う心をもっていけば、そこに平和と喜びがもたらされます。キリストご自身がそのようにして生きられたのです。「木工 (たくみ) のわざをば、

自ら務め、世人の重荷を分かちしイエスよ」(讚美歌 367)と歌っていき
ましょう。